

## 「暴風雪災害に思う」

皆様ご存じのように、本年3月2日に北海道を襲った暴風雪によって9名の貴重な命が失われました。道路の吹雪対策の研究を担っている者として胸が痛みます。

私たちも「冬道安全ガイド 吹雪ドライブのコツ」などのパンフレットを作って、冬道での運転における注意事項や装備品について啓蒙は行ってきたのですが、もっと積極的にPRをしておけば良かったと感じています。

今回の暴風雪災害を受けてマスコミから「このような吹雪で立ち往生したときにはどうしたらよいのでしょうか？」と質問を受けました。

「一酸化炭素中毒が最も危険なので、エンジンを切って救援を待つこと。そのために、あらかじめ自動車に毛布や防寒服などを積んでおくことが必要です。どうしても暖を取る必要がある場合は、排気口が埋まらないように時々除雪しながらエンジンを掛けてください……。」

「それらの装備が無かった場合は、どうしたらよいのですか？」

「……」

明確に答えることはできませんでした。停車している場所の条件（吹きだまりやすい箇所か）や、風向に対してどのような角度で停車しているか、さらに、そのときの服装（北海道では暖房で室内の温度が高く、冬でも軽装の人が多なのは事実）、すぐ近くに避難できる場所があるか、吹雪の激しさはどの程度か等によって判断は異なると思います。ただ、私は、最悪のケースを避けるには、基本的にはエンジンを切って車の中にとどまって救援を待つことが良いと考えています。これは、エンジンを切ることによって一酸化炭素中毒の恐れが無くなることに加え、車外で後続車からはねられる危険性や、吹雪で濡れて体温を奪われる恐れが無くなるからです。もちろん、エンジンを切った車内での厳しい寒さは想像に難くありません。ただ、あくまで推測ですが、衣類が乾いた状態であれば、しばらくは寒さに耐えることができるのではないのでしょうか。サバイバルの観点からは、人間は低温状態におかれると手足などの血流を抑えて、内臓などの深部体温を保つようになるそうです。また、低体温症になっても仮死状態から蘇生した事例もあるようです。もちろん、これらには個人差がありますので、やはり、冬道運転の際には、吹雪で立ち往生したときのための装備、最低限、防寒対策が必要です。毛布はかさばりますが、最近は、レスキューシート（サバイバルシート）というコンパクトで安価な製品もあり自動車の小物入れにも収納できます。加えて、基本的なことですが、冬に外出する際には十分に着込むことも必要でしょう。

ところで、車の排気ガスによる一酸化炭素中毒は、吹雪の時だけ注意が必要なものではありません。スキー場や除雪作業中にエンジンを掛けながら車中で休憩を取っていて中毒死した例もあります。雪国に暮らす市民として、車の排気ガスによる一酸化炭素中毒の危険性は常に意識しておかなければなりません。今回の事故は、この危険性を私たちに改めて認識させるための大きな代償でした。

二度とこのような悲しい出来事が起こらないよう、心を引き締めて吹雪対策の研究と啓蒙に取り組んでいきたいと考えています。最後に、亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

参考 「冬道安全ガイド 吹雪ドライブのコツ」

<http://www2.ceri.go.jp/jpn/pdf2/panf-201012-guide.pdf>

<http://www.northern-road.jp/navi/pamphlet/pdf/fukidamari.pdf>

（雪氷チーム 上席研究員 松澤 勝）

\* \* \* \*

表紙左上記号 ISSN 1881-0497の説明

国際的なコード番号であるISSN (International Standard Serial Number : 国際標準逐次刊行物番号)は、ISSN ネットワークが管理する、逐次刊行物を識別するための固有の番号です。この番号は国立国会図書館ISSN日本センターから付与されたものです。